



“誤った思い込み” について

毛塚 満男
東京都立駒込病院医長

長年心身症の患者さんとお付き合いしていて一番印象に残ることは、大多数の人が“誤った思い込み”をしていて、それに全く気づかずにいる事実です。

ある若い女性の患者さんは、結婚後主人の親と同居してから持病の喘息が悪化し、別居しましたが完全には良くなりませんので当科に来院しました。話をよく聞くと、今だに姑と実父が子育てにうるさく干渉してきて、無下にも断れず、板挟みになり、苛々を夫と子供に当ててしまい自己嫌悪に陥ってしまうということでした。

この患者さんの病理としては、分離不安・病的依存心・受け身の操作性・自己の主体性の無さなどがあることは明らかなのですが、もっと重要だと感じたのは“誤った思い込み”を有していたことでした。彼女は、「目上の者は敬うべきであり、決して楯突いてはいけなし、命じられたことは少々無理してでもやるべきであると信じてきた。これまでの人生では、この信念で誰からも信頼され愛されてきたのに、姑にはどうもうまくいかないんです」と悩みを語ってくれました。信じられないことですが、30歳を過ぎているのに彼女は「結婚しても誠意をもって尽くせば、姑にも実母と同じように愛してもらえるに違いない」と姑にも一体感を期待していたのです。

筆者が、「姑にとっては、貴方は最愛の息子を盗みとった泥棒猫であり、憎くて仕方がないし、離婚させたいぐらいの気持ちもあるのが普通なんですよ。貴方の中にも、姑なんか邪魔で仕方がなく、早く死んでほしい気持ちもあるでしょう？」と説明すると、患者は「ああ、そうなんだ！ でもそういうことは、絶対考えちゃいけないと思ってました」と驚いた様子でした。

精神分析的に考えると、彼女は無意識的に母親の考え方や生き方を理想化していたと思われます。それは、「他人に迷惑をかけてはいけない」「人を差別してはいけない」「人を傷つけてはいけない」「誠意をもって話せば分かる」「人を悪く見えてはいけない」「争いごとをしてはいけない」「自分と同じように他人もつらい